



国土と言葉

八

本多弘之

honda hironuki

教えとなった国土すなわち浄土とは、「願生」の意欲の対象である。それを『浄土論』では、観察門で観の内容として二十九種の莊嚴功德に開いている。この世の国土に模して教えの国土が開かれるのではあるが、この世のわれらが生活する国土は、われらの生存が身体として誕生する時にすでに与えられるのであり、感覚機能の六根でそこを生活の場所

として感覚し意識するのであって、ことさらにそれを観察し了解しなければその意味がない、というものではない。それに対して教えとしての浄土が観察の対象とされるのは、宗教的な意欲それ自体、つまり「願生心」が何を求めるのか、何を依り処とするのかを、教えの形を通して判明にするためなのである。浄土という場所を仏法の主体化のために呼

びかけるのは、「願生」の意欲が個人の意欲より深い存在の根源に打ち込まれている意欲だからである。われらが意識している意欲は、内に自我を限りなく愛着している「末那識」と同時に起こっていることによって、いかに切実な要求であろうとも、煩惱がらみであることを拭い去れない。つまり純粹な意欲になりえない。別の言葉で言うなら、たとえ浄土

を願っても、自力の意欲の影を払い去ることができない。だから、如来の世界たる浄土をよく観察するということが、如来の大悲の世界が徹底的にわれらの濁世の延長にはないことを自覚させ、自力無効に気づかせるためだともいえよう。

われらの意識下には、存在の根源にある本当の生存の意味を知りたい、その本来の存在を回復したいという隠れたる悲願が埋め込まれている。それは自力の意欲の次元、われらが自分で自覚できる表層の意識の次元には出てこない、深層の意欲とでもいえるべきはたらくきである。その深層の意欲（如来の意欲）に教えを通して目覚めさせるために、その意欲の内容となるべき国土を莊嚴（かたち）に表すこと）するのである。形なき意欲の深層を形に表すのである。

だから、国土とはいっても、この世で生きている場所のような空間が、もうひとつどこかに存在することを言わんとするわけではない。ましてや死後の靈魂の集積地などのことではありえない。そういう他界空間としてしか如来の教えを聞けないのは、教えられていく純粋空間を、表層の意欲で妄想するからではないかと思う。もちろん、この煩惱のいのちを終えて一如無為の境界に帰って行かれた先達が、一如から発起する法蔵願心の因縁にからんではたらいいてくるなら、それは浄土の

菩薩の意味を具しているともいえよう。それは三世を貫く永劫修行の願力のひとつの表現に触れることでもあるかと思う。

さて、浄土の莊嚴功德を観察することは、願生の意欲の深さを知らされることである。經典の言葉としての「願生」は、われらに与えられている根源の意欲なのである。いな、如来の意欲なのである。この意欲のもよおしで、われらは無限大悲のたいなる恵みに導かれる。それが、本願の呼び声がわれらに聞こえるという不思議な事実なのである。

願生の意欲は「志願無倦」である。終わることがない。われらに無限大悲のはたらきが感受されたとき、「前念命終 後念即生」の一念が発起する。表層意識が破られて、見えざる深層の意欲が発起する。それは妄念が滅して、深層の新しい意欲が誕生することなのである。だから「願生彼国 即得往生」の「即」は時間の一瞬ではない。むしろ一瞬の深みとでもいえるべきことなのである。重奏する低音が高音の下に聞き届けられたとでもいえるべき構造なのである。

だから、「前念命終」は「命終」といつても、死んだのだからそれで終わりか、といえばそうではない。死はいわば宗教言語の譬喩的表現であって、「無倦」の根源の意欲に触れることを表すのである。こういう深みの声は、表層意識に引きずり回らされている日常

性からは、彼岸にあるがごとくに遠いものであろう。一番根底にあつて近いことが、一番遠くに感じられてくるのである。それを現在の直下に回復してくるはたらきが、如来の招喚の名だといふのである。言葉に依りつつ言葉を超えた深層の本来性を、存在の大地として感覚せしめる名告りなのである。それにおいて、時を超えた深みを今生のここに開示されるのである。

「一切諸法に願を根本となす」と『十住毘婆沙論』にはいわれている。この願とは「清淨意欲」であるともいわれる。われらの表層意識の生活空間を突破して、根源の清淨なる本来性を呼び起こすものが、「願」なのである。この願には、静かに限りなくあふれ出る泉のような力がある。この願こそが、暗黒の生活空間を明るみに転ずる力を持つのである。願の根底を如来の側からは、「欲生我国」とわれらに語りかける。如来の願心が表層意識を突破して、われらに呼びかける言葉が「欲生心」なのである。その欲生心がわれらを聞法意欲に導いて、信心にまで歩ませる。だからこの「欲生」を親鸞は「如来の勅命」というのである。そしてまた、「回向心」であるともいうのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）